

	[4]
氏 名	肥後 時尚 <small>ひご ときひさ</small>
博士の専攻分野の名称	博士 (文学)
学位記番号	文博第 266 号
学位授与の日付	2020 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	古代エジプトのマアトの研究 —「二柱のマアト」の変遷から—
論文審査委員	主査教授 吹田 浩 副査教授 米田 文孝 副査教授 中村 仁志 副査教授 新谷 英治

論文内容の要旨

肥後時尚氏の博士(文学)の学位請求論文『古代エジプトのマアトの研究—「二柱のマアト」の変遷から—』は、古代エジプト史におけるマアトの概念の理解を「二柱のマアト」(マアティ)という観点から扱い、古代エジプトの歴史の前半期における「二柱のマアト」の内容とその変遷を明らかにすることを主な目的とする。本論文は、肥後氏の鋭敏な問題意識と一次史料の読解を基礎とする研究姿勢を背景に、先行研究において未だ十分ではない現状にある、マアトのもつ特殊な側面である「二柱のマアト」の実体を明らかにしている。本論文は、全7章16節から構成される。全体の章・節の構成は、次の通りである。

序章 古代エジプトのマアトの概念

- 第1節 マアトの概念
- 第2節 王権との関係
- 第3節 道徳的・倫理的側面
- 第4節 マアト女神
- 第5節 「二柱のマアト」m3cty

第1章 古代エジプトの葬祭文学

- 第1節 テキストの変遷
- 第2節 宗教的・神学的内容の難しさ

第2章 古王国時代における「二柱のマアト」

- 第1節 「ピラミッド・テキスト」における二柱のマアト
- 第2節 「パレルモ・ストーン」における二柱のマアト

- 第3章 中王国時代における「二柱のマアト」
 - 第1節 古代エジプトの「コフィン・テキスト」
 - 第2節 下界の神ソカルとの関係
 - 第3節 独立した神格としての「二柱のマアト」
 - 第4節 太陽神との関係
 - 第5節 その他の mꜣꜥty の事例
- 第4章 「二柱のマアトの変遷」
 - 第1節 古王国時代における再解釈
 - 第2節 中王国時代における再解釈
- 第5章 「二柱のマアト」の習合
- 終章

序章では、古代エジプトのマアト研究における「二柱のマアト」の研究意義を明らかにするため、長年にわたり継続されてきたマアトの先行研究の成果を踏まえながら、マアトの概念が併せもつ「王権との関係」(第2節)、「道徳的・倫理的側面」(第3節)、「マアト女神」(第4節)の側面の内容を概観する。そして、第5節においてマアト女神の特殊な形態である「二柱のマアト」とその研究史を悉皆的に獵書・吟味し、研究の課題を明確化する。

第1章では、ピラミッド・テキストやコフィン・テキスト、死者の書などの葬祭文学の特徴とその史的価値を整理する。周知のように、エジプト史における思想や文化の変化は、政治的変化や歴史の変化に必ずしも対応しない点には注意が必要である。葬祭文学は、エジプト人の思想や彼らの神々、死後の世界の語句の多くが考古資料上で確認されないなど、意味を特定できない語句を多く残している。これらの課題を受け、その前提となる葬祭文学の内容を可能な限り正確に理解する必要性について言及する。

第2章では、最初期の「二柱のマアト」の事例の検討を行うため、古王国時代の史料の分析に焦点をおく。第1節では、ピラミッド・テキストに記された「二柱のマアト」に関連する5例の内容を検討する。先行研究で最初期の「二柱のマアト」とされてきた呪文第260番の2つの記述は、「聞く」や「命じる」といった動作の主語を担うことから神格として考えられるものの、文脈の解釈が多義的であることや、女神や神格の限定符が記されていないことから、必ずしも2柱のマアト女神の最初期の事例であると断定できないであろう。一方で、同様の3例の事例が1隻か2隻の船の限定符をともない、神聖な船として利用されていることは明らかである。一部の事例では、2隻の船の限定符をともなって記述され、それに太陽神を指す代名詞が付記されていることから、「二柱のマアト」が太陽神の船として描写されていることを明らかにする。

第2節では、パレルモ・ストーンにおける「二柱のマアト」の記述が2羽の隼を載せた聖船の限定符を伴い、この語が儀礼にあたって造られる船を指すことを明らかにする。一方、祭と船の記号で示される一連の語句が、ソカルに関連した「マアティの船の祭」と読まれるべきことを指摘する。コフィン・テキストに記されたマアティの祭は、この祭の存在を示唆する。各事例の

考察を通して、古王国時代のマアティは「独立した神格」と「太陽神の二隻の船」、「ソカルに関連する船」の、3つの側面をもつことを明らかにする。

第3章では、コフィン・テキストに記された13例を検討する。古王国時代と同様、「二柱のマアト」にはソカルとの関連を示す側面、独立した神格としての側面、そして太陽神の船としての側面をもつことを確認する。一方、これら側面に明確に該当しない事例として、船としての側面を示すもののその所有者が明らかでない事例や、双数形のマアトではなくニスバ形容詞として理解されるべき記述、現時点で意味の特定が困難な事例などを抽出している。

第4章では、古王国時代から中王国時代にかけての事例の限定符や表意文字に注目し、これらの時代に再解釈が2度行われたことを推察する。パレルモ・ストーンでは、1隻の船の限定符や省略された記号でその意味を示している。船は2隻として刻まれず、多くの事例において船の記号に2羽の隼が刻まれる。この点から、肥後氏は最初期におけるマアティの船は1隻であり、語の双数形は2羽の隼を指していたと推察する。一方、ピラミッド・テキストや同時代の碑文では、マアティの語は明らかに2隻の船として描写されている。

この変遷から、肥後氏は最も古い時代における双数形の「二羽の隼」の意図が正確に伝承されず、後世の編纂者に双数形を船の数に由来するものとして再解釈されたと推測する。そして、コフィン・テキストの時代になると、1隻や2隻の船とは認識されず、2柱の「女神」や「神」として解釈されている点を指摘する。太陽神の船やソカルの船を意味する場合でも、この語には女神や神の限定符のみが付記され、2度目の再解釈がなされたことがうかがえる。

ピラミッド・テキストでは明確な神の姿をもたなかった「二柱のマアト」は、この時代に至ってその側面に関わらず、「二柱のマアト女神」や「二柱の神」として理解されることとなった。肥後氏は、この時代に2柱の女神としての「二柱のマアト」が、その後の死者の書で図像化されるような「二柱のマアト」のイメージや図像を形成する契機となったとする。

第5章では、古代エジプト宗教に起こる神々の集合関係に注目し、マアトとその他の神的存在との習合関係から、「二柱のマアト」の実体を探究する。コフィン・テキストの記述に基づき、「マアト・生命」の組み合わせが、「テフヌート・シュー」「ジェット・ネヘフ」「右目・左目」「メスケテト・マンジェット」との習合関係を形成することを確認する。いずれの関係も2つの要素からなる一組として描写されることや、多くの組み合わせがそれぞれの構成要素のなかに「死」と「生」の性格をもつこと、そしてメスケテト・マンジェットの船がマアティのもつ太陽神の船の特徴と一致することを踏まえ、「マアト・生命」の組み合わせが「二柱のマアト」の実体であり、上述の習合関係を形成している可能性が高いことを考察する。

なお、セピの木棺で男神とマアト女神の限定符の組み合わせが確認できるように、当時のテキスト編纂者はマアティをテフヌートとシューのような、女神と男神の一組であると認識していた。そして、これらの事例にみられる「女神と男神」や「死と生」のような、一対の概念の組み合わせとして認識されたイメージが、その後の新王国時代に図像として明確に描写される、「二柱のマアト」の姿に引き継がれたと推察する。

以上の成果を踏まえ、終章では、古代エジプト史の前半期における「二柱のマアト」の内容

とその変遷を明らかにする。

論文審査結果の要旨

本論文は、古代エジプトの「マアト」という概念を文献学と考古学の手法を結びつけてアプローチしたものである。マアトは極めて大きな概念であり、古代エジプト史のあらゆる場面に頻繁に出現する。そのため、今日までの研究は事実上限定した史資料のみを扱っている。肥後氏の論考は、「二柱のマアト」に対象を絞ることにより、初期王朝時代のパレルモ・ストーンから古王国時代のピラミッド・テキスト、中王国時代のコフィン・テキストまでのエジプト史の前半部分に、一貫性のある説明を行うことに成功している。

肥後氏は、広く研究者に使われている原資料を翻刻した公刊物を用いて基本的に忠実な文献学研究に取り組むだけでなく、博物館が所蔵する原資料との照合も行っており、肥後氏が古期・中期エジプト語の十分な読解力を有していることを示している。また、「二柱のマアト」に神々や諸概念との二元論的な組み合わせ関係を見出し、「二柱のマアト」の実体に新たなアプローチを行っている。このような肥後氏の研究は、国際的なレベルに到達しており、国際的にも評価の高い *Bibliotheca Orientalis* にも 2020 年 2 月に掲載が決まっている。

さて、古代エジプト語はその表記方法が完成しておらず、明確な統一された形式で記述されない場合が多いことに加え、テキストの内容にも神話的な暗示が多分に含まれることから、テキストの読解は研究者によって異なる。そのため、個々のテキストだけではなく、並行したテキストや前後の時代のテキストと比較検討が必要である。肥後氏は、初期王朝時代のパレルモ・ストーンに見られるマアティに 2 羽の隼が描かれていることから、本来、マアティは 1 隻の聖船であったとする。これが、古王国時代のピラミッド・テキストの時代になると、「再解釈」が行われ、2 隻の聖船になったとする興味深い考えを提示している。「再解釈」という説明は、諸説ある解釈の中で現在、最も合理的に思われる。このエジプト語の曖昧な表記方法が、古王国時代のピラミッド・テキストでは、さらに「独立した神格」「太陽神の二隻の船」「ソカルに関連する船」といった、複数の意味を持つ語に発展をさせることになった。このような言葉の多義性に、一貫性のある説明ができるようになった点を評価したい。

このような解釈は、中王国時代のコフィン・テキストの例にも応用が可能であり、「再解釈」によって、「二柱のマアト女神」や「二柱の神」として、一応の説明に成功している。一方で、コフィン・テキストの所有者が王族から州侯と呼ばれる地方有力者に拡散したことにより、「再解釈」がさらに促進された可能性がある。所有者のわからない船の事例やニスバ形容詞の事例、解釈不能な事例などである。中王国時代には新しい考えが消長した時代であり、現時点では問題の所在を明らかにした点や、これらを可能せしめた難解なテキスト読解力も評価したい。

以上のような堅実なテキストの分析に基づく研究に加えて、本論文で評価に値する点は、

「二柱のマアト」に、「マアト＝テフヌート＝ジェット」「アंक＝シュー＝ネヘフ」という組み合わせ関係を想定したことである。この想定によって、マアトの実体として生命(アंक)をおき、改めてマアトの概念の重要性を確認している。これに加えて、「二柱のマアト」の図像として、男神(シュー)があった事例の説明も可能となった点は極めて独創的である。

公聴会においても、本論文で提示された成果や見解、論点は高く評価され、充実した論文内容に相応した、多岐に及ぶ活発な意見交換や質疑応答が交わされた。まず、古代エジプト史研究およびマアトにおける本研究の意義についての議論では、本論文で得られた古代エジプト史の前半期における「二柱のマアト」の理解とその変遷は、古代エジプトにおけるマアトの概念の理解を促進するのみならず、マアトの概念に多大な影響を与えた古代エジプト人のもつ二元論的思考に関する研究相互の文化史研究に寄与することが確認された。

なお、本論文で取り扱われなかった古代エジプト 3 千年史の後半部分における「二柱のマアト」の探求・理解については、その見通しを述べているとはいえ、今後の課題である。「マアト」の事例と比較して「二柱のマアト」の事例が少ないという実態もあり、これらの課題を解き明かすためにも、豊富な史資料に「二柱のマアト」が多様な姿で出現する新王国時代の研究が求められる。さらに、マアトの概念に習合関係を見出す手法もその応用に大きな可能性を感じさせる一方、習合関係を際限なく想定・敷衍しないことに留意した研究の推進が期待される。

マアトおよび「二柱のマアト」に関連する考古資料を研究対象とする研究意義に関する質問と指摘では、古代エジプトのマアトは文献史料のみならず数多くの考古資料にも示されている状況を踏まえ、肥後氏は考古資料の集成・分析の推進が未だ研究課題としてあることを認識している。特に古代エジプトの新王国時代以降には、マアトの小神殿遺構や神殿内外のレリーフなど、マアトが考古資料上に頻繁に表現され、マアト研究における考古資料の重要性には疑念がないことを理解している。「二柱のマアト」の場合も同様に、この語やこの語の示す図像が考古資料に残されている可能性を十分に認識しており、今後の発展が期待される。

この認識は肥後氏が第 3 章で論じるように、「コフィン・テキスト」のような難解な史料の理解では、テキストの読解のみでは限界がある。一方、「コフィン・テキスト」が記された木棺は、編年や出土地、製作技法や各種テキストの配置場所などと、テキストが表記する内容との相関関係が看取できる。本研究で課題とされたテキストの翻訳・解釈の不明瞭な点も、テキストの読解に留まらず、考古資料と併せて複合的に検討・吟味することを通じ、より明確な史料理解に結実することが期待される。

以上を総合して、本論文は豊富な文献史料の分析を基礎に古代エジプト史の前半期における「二柱のマアト」の実像を明らかにし、エジプト古王国・中王国時代における「二柱のマアト」の変遷を多角的に論述した専門的な研究論文であり、今後の古代エジプト史研究をはじめとする関連諸分野に波及する影響は多大であると判断する。

よって、本論文は博士論文として価値あるものとして認める。